帆

を思ふ方へ、擬ひ行る由の名なるべし、斯の意は詳ならず、多氣と多藝とは、通はし云る例多かり、さて當藝斯は、今の加遲なることは決けれども、其形狀はいかゞありけむ、今世と同じかりきや、異なりきや、詳ならず、

〔延喜式五十雜〕凡大宰貢綿穀船者、擇買勝載二百五十石以上、三百石以下、著梅進上、便即令習用梅、其用度充正稅、

〔倭名類聚抄十一舟具〕帆　四聲字苑云、帆、音凡、一音泛、和名保、風衣也、一云、船上掛檣上、取風進船幔也、釋名云、帆、或以席爲之、故曰帆席也、

〔箋注倭名類聚抄三舟具〕按、保與不通、合訓不々牟、又訓保々牟、帆合風以進船也、○略中釋名云、隨風張幔曰帆、帆汎也、使舟疾、汎々然也、即此義、按說文、無帆字、有颿字、云、馬疾步也、轉謂使舟疾者爲颿、玄應音義引三蒼云、颿、船上張布帊也、吳都賦、樓船擧颿而過肆、劉淵林注、颿者船帳也、徐鉉曰、舟船之颿、本用此字、今別作帆、非是、

〔伊呂波字類抄保雜物〕颿ホ　帆席　帆風衣也、已上ホ、

〔倭訓栞前編二十八保〕ほ　帆は穂より轉せるにや、遠くよりあらはに見ゆる意なるべし、凡てあらはなる事を、帆にも穂にもよせていへり、又羽と通ふなるべし、字彙、棹船羽也、と見えたり、南京福建船の帆は竹のあじろなり、北國をまわる船も、此に效ふといへり、さゝほは箬篷也、木綿ほは縫布也、童蒙頌韻に篷もよめり、

〔和爾雅五器用〕帆颿颿並同　彌帆ヤホ　帆席ムシロ

〔倭訓栞前編三十四也〕やほ　彌帆の義、帆の重なるをいへり、よて本帆、や帆などいへり、

〔名物六器財二舟楫桴筏〕風篷ホヨマ同上、(品字箋)布帆所以乘風進者、多編竹爲之、謂之風篷、　蒲帆ホムシロ　布帆モメンホ晉書顧愷之傳、愷之嘗因假還、遭風大敗、愷之與仲堪牋曰、地名破冢、眞破冢、而出行人安穩、布帆無恙、李詩、布帆無恙掛秋風、殷仲堪、特以布帆借之、至破冢、

〔雲錦隨筆二〕今の帆木綿といへる織。帆。は、此松右衞門の工夫より始まりしよし、故に是を松。右。衞。